

「今、今日を生きる」

田畑正久

仏教へのご縁

私は大学に入るまでは仏教というものは、もう今、現在には役に立たないものだと
思っておりまして。それが大学で学園紛争ということを経験し、いろいろ考えるきつ
かけがありました。私は学生時代に剣道をしておりまして、剣道部の友人がたまたま
九州大学の仏教青年会というグループに入っておりまして、その寮を訪ねていったこ
とがありました。九大の仏教青年会は法学部と医学部の先輩方が無料法律相談とか、
無料健康相談というボランティア活動をしておりまして。そのボランティア活動の
加勢をする学生は部屋代がただ(食費だけ負担)ということが分かりまして、私はそ
の部屋代がただの方に魅かれて、その仏教青年会に入りました。

仏教青年会に入って2年目、学生の世話係の総務という役割がまわってきまされたの
で、受けてしておりました。仏教青年会を代表して挨拶あいさつをしてくれと言われる機会も
ありましたが、私は「仏教なんかなくても生きていける」と思っておりまして、非
常にとまどいを覚えておりました。そしたら、たまたまあるとき新聞を見ておりまし
たら、福岡教育大学仏教研究会の催し物があるという案内が新聞に出ておりました。
私はその新聞記事を見て、連絡先をたずねて好奇心からその研究会に行ってみました。
1

よき師との出会い

そこでは、細川 巖いわという先生、この先生はバケ学、化学の教授をされておしまし
たけども、仏教のお話を学生さんとか一般向けに、先生の自宅を会場としてなされて
いました。その時が私には初めて仏教(浄土教)の話を感じ取りと聞くという機会
だったのですけれども、非常に興味深いたとえ話がありました。

それは卵のたとえといいますかね、私たちは卵の殻の中におけるような存在なのだと。
殻というのは「私」「私」という自己中心の思いだそうです。で、その殻の中にお
る私はどうしたら仕合わせになれるだろうか、と考える。そうするとやはりみんなか
ら善い人間だと思われたい、悪い人間だとは思われたくない。できることならば損を
したくない、得になることを心がけよう。そしてできることならば勝ち組の方に入り
たい、負け組の方に入りたくない。そういう善悪、損得、勝ち負けに考えながら一生
懸命生きていくのだ。しかし、そういうことに振り回されながら結局は卵は腐って死
んでしまう、というのが私たちの人生なのだと。しかし、卵は死ぬために生まれてき
たのかという決してそうではない。卵は親鳥に抱かれて親鳥から熱を受ける。熱
というのとは仏教で言うならば教えということだそうです。その教えを受けていくと
その黄身の部分がだんだん成長し、ものを見る目、考える頭、食べる嘴くちばし、羽ばたく羽、

人生を歩む足が出てきて、そして時機熟して、ひよこになる。このひよこになるというのを禅宗では「悟り」といい、浄土教では「信心をいただく」ということなのだ。ひよこになって初めて自分が殻の中にいたなあということに気づく、と同時に大きな仏教の世界があるということに気づく。そしてそのひよこになったものは大きな光のもとをだんだん親鳥になつていくという歩みをしていく、これを仏になるというのだ。こういう例え話でした。

一生被教育者としての歩み

私自身のこれまで二十二年間の歩みを振り返ったときに、ほんとに先生が言われるように善悪、損得、勝ち負けに振り回されていたなということを思いました。お話の後の質疑応答の時間に、私は「先生、その大きな世界に出て見たいんですけど」と質問をしたのです。そしたら先生は、どう答えられたかというと、「毎月一回こういう会をしていますから、一年続けてみませんか」と言われました。それから一年続けました。一年間続けた頃、先生に一年間の感想と、今後のことをちよつと相談したら、「そうですね、田畑さん、三年続けたら分かりますよ。」とこう言われたのです。それから三年続けたのですけども、三年も続けないうちに分かったことがありました。それは、仏教というのは一生聞いていく教えなのだということが分かりました。それで今日までその先生とのご縁で、三十数年仏教の世界、仏教の学びをさせていただいております。

生老病死の四苦を共通の課題とする医療と仏教

そうしているうちに私は大学を卒業しまして、消化器外科の仕事を主にしてまいりました。その外科の仕事をしながら仏法の学びをしていたのですが、最初のうちは仏教の学びと、医師としての仕事というのは別々のことを平行してしているような感じがしていたのです。ある時、埼玉医科大学の哲学の教授で秋月龍珉という禅宗のお坊さん（師家）がいらつしやいまして、その先生の本を読んでいたらこんなことが書いてありました。「医療と仏教は同じ生老病死の課題の四苦に取り組んでいるのだ。だけれども日本では両者の協力関係ができていない」。医学部の学生さんに「皆さん方がこれから仕事をやる医療の領域というのは人間の生老病死の四苦に取り組むのです。仏教は同じ生老病死の四苦の課題に取り組んで2千数百年の歴史があります。そして、それなりの解決の方法を見出しています。医療の仕事に携わるものはぜひとも仏教的素養というものを身に付けてほしい」、ということを医学部の学生さんにつつと語りかけていたということが本に書かれています。私は非常に勇気付けられました。そして医療と仏教が同じことを課題としているのだなということを改めて思いました。その後も仏教の学びと外科の仕事をずっとしてまいりました。

医療は老病死の先送り

医師としての経験を約20年積んで、ある病院の外科の責任者になっていた時、70歳代の大腸がんの患者さんの治療として私たち外科チームで手術をしました。こ

の患者さんその後五年間、再発がないかといことを注意しながら外来で経過をみていきました。そして五年経過したときにこの患者さんに「よかったですね、もう大腸がんの心配はありませんよ」と、患者さんにお話をして、開業医の先生にお返しをして、「もう病院にはこなくてもいいですよ」という話になっておりました。

しかし、その二年後、今度は体が黄色くなつてかえつてこられたのです。これは医学的にいうと黄疸といいますけども、黄疸が出てまた病院のほうにこられました。そこで検査をしてみましたら、こんどはすい臓がんが発症していて、そしてそれが肝臓の方にたくさん転移しているという状態でした。すい臓がんというのはなかなか見つかるのが難しいところでありますけども、まして肝臓にたくさん転移しているというのであれば今の医学ではちょっと対応ができません。この患者さんはやはり肝臓転移でだんだん状態が悪くなつてなくなりました。

私はこのときに私たち外科チームが手術をしたということは老病死につかまるのを5年ないし7年先送りしたということだったんだなということをおもいました。よく考えてみると、私たち医療という仕事はこの老病死の先送りを一生懸命しているのだなということです。

四苦を超える道としての仏道

仏教の学びをしてきますと、仏教は生死を超える道ということをお話してくれます。生死というのは生きる、死ぬと書いてシヨウジといいます。生死を超えるというのは生老病死による四苦の苦しみを超えるという意味もありますし、生死というのは私たちの迷いという意味でもあります。そういう迷い、そういう四苦を超える道を仏教は教えてくれています。

なかなかこれは世間的な常識で「生死を越える」なんていつてもなかなか分かりづらいのですが、その仏教の学びをしていくと、「生死を超える」としか表現のしようのないその生死を本当に超えていく道ということをお話していただくんだなということをお話させていただきます。

私はそれで、やはり医療と仏教が協力してこの人間の生老病死の四苦の課題に取り組むということが大切だと思つて、そのことへの理解を多くの人にしていただくために、今、取り組んでいるところです。今日はその「今、今日を生きる」という講題で、その生死を超える道ということをお話させていただきます。どうかと思つております。

時間をどう考えていくか

私たち普通世間では、時間というものを直線的に考えまして、過去があり現在があり未来があるというふうにならずと時間は直線的に経過するように思っています。しかし、仏教は「今、今日しかない」のだとお話してくれています。ここところが非常に難しいところですが、仏教は実感を大切にします。そして仏教は「今、今日を大事にしましょう」とお話してくれているのです。

私が大分県で医療関係者の人たちに、「仏教と医療の協力」という話をさせていた時、仏教は「明日はありません、今、今日が大事ですよ」と教えてくれます、という話をした時に私の知り合いのある病院の院長先生が質問をされたのです。どういった内容かといったら、その方が「田畑さん、私たちは明るい未来がある、明るい明日があることが、今日を生きるエネルギーになるのですよ。明日がないなんていわれたら困るじゃないですか」、非常に素直な質問ですね、大事な課題です。

私はこういう質問に象徴されるように、仏教抜きの間では、いつのまにか明日こそしあわせになるぞ、これの解決がいたらもうちよつと楽になるぞ、といつていつの間にか明日が目標（目的）になっていて、今日は明日のための準備のような位置にあつかつてないだろうか、ということをおもわせていただきました。

目的に尊厳があり、手段・方法・道具には値段がある

よく命の尊厳ということを言いますけど。尊いとか尊くないとか判断する基準というのは、いろいろあるようですけども、私が教えていただいた哲学の教授がこんなことを言っておりました。

「目的には尊厳があり、手段・方法・道具の位置にあるものは値段がある」とカントという哲学者が言っているのだそうです。目的はとりかえようがない、一番大事な目的ですけども、手段・方法・道具の位置にあるものは、目的が達成されたならば使い捨てにされるといふ位置づけになるわけです。だから手段・方法には値段があるといふことは相対的な価値の位置にあるものだということでしょう。そして目的が達成されたならばもうそれはいらぬという可能性があるわけです。

「明日こそ幸せになるぞ」、「明日こそ幸せになるぞ」と生きているときは明日が目的であつて、今日は明日のための準備の位置にあるといふふうになっているのです。これはパスカルというパスカルの原理で有名なパスカルさん。この方はクリスチャンですけども、パンセという本の中でそのことを、私たち人間はいつのまにか「明日こそ幸せになるぞ、明日こそ幸せになるぞ、と死ぬまで幸せになる準備ばかりしている」といふ主旨のことを書かれています。言われてみればそうかもしれない。やつぱりここに私たちはいつの間にか、明日こそ、明日こそを生きているといふ現代人の有り方があるように思われます。

今、今日の受け取り

仏教が「生死を超えぬ道」という形で教えてくれているのはこのあたりに非常に大事なヒントがあると思うのです。「今、今日が大事だ」といふ仏さんの心をいろいろたずねてみますと、何人かの先生の言葉が貴重なことを重層的に私に教えてくれているように思われました。一つは養老孟司という先生です。この先生は東大の解剖の教授をされておりましたけれど、マスコミなんかで非常な有名人ですけども、この先生の対談というものを読んで教えられることがありました。そこではこんなことをおっしゃっていました。たとえば、「昨日の夜、昨日の私は死んだんだ。そして今日の朝、今日の私が誕生した。今日という日は初体験の日なのです。そして、今日の夜、

今日の私は死んでいくのです」、とこういわれています。そして明日の朝また目が覚めたらまた新しい私が誕生していくのです。それは毎日、生まれては死に、生まれては死にということを繰り返しているということを教えてくれます。それは一日、一日が貴重な時であり、有ること難しの一日である。その一日一日を大切にしましょうということを言わんとされているのだと思います。

もう一つは、私たちの仏教の先生が一日一日を仏教の教えをいただいて大事に生きるかどうかということをお教えしようとされて、「今日の朝、目が覚めた時に、今日の命がいただけた、南無阿弥陀仏」と今日一日をスタートするのですよ」と教えてくれました。そして、今日、夜にやすむときに「今日、私なりに精一杯生きさせていただきました、南無阿弥陀仏」とやすんでいくんですよ」と教えてくれました。

私はその二人の先生を合わせまして、毎日、毎日、目が覚めたときに「今日の命をいただけた南無阿弥陀仏」と今日、一日をスタートさせていただきます。そして、今日、夜やすむときに「今日、私なりに精一杯生きさせていただきました、南無阿弥陀仏」と死んでいくんだな、ということをおぼえていただいております。

念仏のはたらきで区切る

そういうことを考えながら、またある先生からこんなことを教えていただきました。私たちというのは今、今日という時間をとらえるのがなかなか難しいのだと。確かに今というのは一瞬ですから、なかなかとらえどころがありません。それで今という時間のとらえどころがないと、どういうふうになるかという、いつの間にか過去のことをいろいろ考えて、あの時あしとけばよかった、この時こうしとけばよかったと考える。

もう終わったことを今もつてきて、いろいろ悩む、これは「持ち越し苦労」といいます。一方ではちよつとひまになるとまた未来の心配をこれはどうなるだろうか、あれはどうなるだろうか、とかそういう未来のことをもつてきて心配をします。これは「取り越し苦労」といいます。いつの間にか私たちは「持ち越し苦労」、「取り越し苦労」という形で振り回されていることがあります。

でもその先生はこうおっしゃるのです。そこに区切りをつけることが大事だと。どういうことかといいますと、終わったことに対しては、もうそこで「持ち越し苦労」を昨日と今日の間で区切りをつけるのだと。そして、「取り越し苦労」については明日と今日の間で区切りをつけるのだ。

念仏に込められた智慧

仏法の心、仏の心をいただいてみますと、このお念仏というのは私たちに智慧と命を届けたいという心なのです。私たちがお念仏によつて智慧をいただくということとは、その智慧の部分の味わいとするならば、そういう区切りをつけていただけるといふことかなと思うのです。そうすると昨日までのいろんなことが南無阿弥陀仏でそこで区切りがつく。そして今日一日、精一杯生かされていること受け取って生き

ていこう。そしてふと未来の心配が出てくると、「ああまた私の自力のはからいが始まった、南無阿弥陀仏」と、そこに区切っていた。そういう意味ではお念仏というのは私たちに区切りをつけるということを教えてくれているのだなと思います。

最初にお話したように、いつの間にか明日が目的であり、今日は明日のための準備の日であるような生き方をしていた私が、今日、一日を過去との区切りがつき、未来との区切りがつく、という区切りを私たちはつけていくことで、今、今日を完結した一日であるかのように受け取り、生きることが輝かせていくというか、今日1日を目的であるかの如くに、大事に生ききっていく道に導かれると教えていただいています。

死にたくないとは宗教的目覚めを求める叫び

それと同時に時間ということを考えてときに、産業医科大学というのが北九州市にあります。そこに非常勤講師でいられておりました古川泰龍という真言宗の僧侶の方がおられました。この先生は数年前なくなりましたけども、その先生の著作を読んでみますと、『死』は救えるか(地湧社、1986年)という本の中で先生はこんなことを書いておりました。「高齢になったり、大きな病気をした患者さんがよく『死にたくない』とか、死なないわけにはいかなから要求をさげて『長生きしたい』とこういうことをおっしゃると。で、この先生は『死にたくない』とか『長生きしたい』とかいうのにはある深い意味があるのだとこういいます。

その心をこんなにおっしゃっていました。「私は生まれてから死ぬという、有限の命を生きてきた。大きな病気をした、だんだん高齢になって死が近づいてきた。だけれども、出会うべきものに出遇わなまま人生を終わろうとしている。何か出遇うべきものに出会ってない、出会うべきものに出会いたい、という思いが『死にたくない』という表現になっているのだ」。

その「死にたくない」というのは生まれてから死ぬという有限の命を生きてきたものが何か出会うべきものに出会わないまま人生を終わろうとしている。何か死に切れない、「死なない命にめぐりあいたい」のだという宗教的目覚めを求める叫びである、ということです。

仏教の言葉に無量寿というのがあります、無量寿というのは無量の寿(いのち)と書きます。いやこれは仏の心、永遠ということでもあります。ということはこの無量寿のいのちにめぐりあいたいのだということだというのが「死にたくない」「長生きしたい」という心ですよ、とおっしゃっていました。私はその言葉は、どうだろうかなと考えていろんな本を読んでみましたら、ある大学の哲学の先生もそんなことをおっしゃっていました。「死にたくない」「長生きしたい」というのは「死のない命にめぐりあいたい」のだという宗教的めざめを求めている叫びであると書いてあったのです。

今、永遠に出遇う

私たちが仏の心、南無阿弥陀仏というお念仏に出会っていくときに、そのお念仏の無量寿に出遇っていくといえます。それは仏の心、永遠の世界に出遇うのです。そうすると私たちは今の一瞬に永遠に出遇うという。これは普通の考えでいうと今と永

遠というのは矛盾するようなことになるのですけども、仏さんの智慧をいただいていると、この今と永遠を生きるということは決して矛盾しなくなるのです。これは生死を超えるという形で表現された世界なのだと思います。そういう今の一瞬に永遠に出遇うというのが浄土教でいうと念仏することによって実現する世界です。

歎異抄という本がありますけども、歎異抄の第一章には「弥陀の誓願不思議にたすけられ、まいらせて往生をばとぐるなりと信じて、念仏申さんと思いつ心のおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたもうなり」というのがあります。撰取不捨というのはおさめとつて、捨てずという意味です。この念仏申さんと思いつ心がおこった時、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたもうなり。とは念仏申さんと思いつ心がおこった時、仏さんの世界（無量寿）、永遠に出遇つていくのです。

いや永遠に出遇うというか、仏さんにお任せしとけばいいという大きな世界です。出遇うときにいつのまにか念仏せずにはおれないという展開があります。その念仏せずにはおれない展開で念仏申さんと思いつ心がおこったときに撰取不捨、永遠という世界に出遇うのです。それは生死を超えるという形で表現している救いの世界だと頂いています。

往生浄土の歩み

今の一瞬に念仏申さんと思いつ心がおこった時に、永遠に出遇つていくという世界があるのです。仏の心に触れ、念仏申さんと思いつ心がおこった時に、私たちは本当に「出会うべきものに出遇つてよかつた」という世界を身体全体で思えるようになってきます。その結果、いつの間にか「いつ死んでもいい、いつまでも長生きしてもいい、おまかせします。私は生かされていることを精一杯、今、今日を一日一日生きつていきます」、という世界に導かれていくのです。

念仏によつて永遠と出遇うという世界（浄土を生きる存在になる）をいただくときに、それは明日があるとか、どうのこうのじゃなくて、今、生かされていることを精一杯生きつていけば、明日はおまかせでいい。もし明日また命が与えられたならば、また明日は明日で精一杯、一日一日大事にして生きつていこう。そういう世界を生きていくものは一日一日を大事に生きつていって、あとはお任せという生き方で、命の短い、長い執われを超えて生きていく世界に導かれていくのです。

私はそういう世界を味わつていかれた先輩方をいろいろ見たり聞いたりする機会がありました。私は医療の世界で、確かに現代の進歩したいろんな治療法で病気をなおしていただいて、できるだけ長生きするというのも大事でしょう。確かに医療で平均寿命が世界を誇るように長生きできるようにになりました。しかし、その多くの高齢者の人たちの現実を医療・福祉の現場で接してみますと、長生きしたことを本当に喜んでいるかどうかということを考えてしまいます。

日本人の平均寿命は昭和二十五年は六十歳だったそうです。それが今は日本人と生まれた人の半分以上が、八十歳を超える時代になりました。このプラス二十年、人生が延びた時間を本当に長生きしてよかつたか、というと、最初のうちはお元気なうちは長生きしてよかつたというふうなことをおっしゃる人が多いのですけども、だん

だんと老病死の現実に直面するようになって、私に愚痴みたいいろいろな訴えをされる方があります。

高齢社会の課題

この老病死をどう受け取るか、というのは高齢社会を迎えまして医療の現場でも福祉の現場でも非常に重大な、大切な課題になっています。しかし、これを単に「健康で長生き」、「健康で長生き」という方向だけではそういう病気になるたときに、老病死の現実が受け取れない、戸惑い、愚痴を言うという事実になって現れているのです。

また命の尊厳ということで、時間的な長さを延ばす延命医療になりすぎて、老病死の受け取りがこれでよいのだろうかという現実が出てきています。この現代日本の医療・福祉の現場の課題は、今後の高齢社会を迎えるにあつたてますます切実な課題となるでしょう。

この現代の課題を、医療と仏教が協力をしてこの生死を超える道を志向して、医療によつてできるだけ長生きさせていただく、病氣も助けていただく。そして助かつて長生きできた時間、その時間を生かして仏法とご縁が出てきて、気付き、目覚めの展開があるならば、老病死の現実に出会うときでも、「人間に生まれてよかった、生きてきてよかった」と、受け取っていけるでしょう。

そして本当に一日一日を目的みたいに大事に生ききつていくという世界に導かれ、そこで、いつ死んでもいい、いつまで長生きしてもいい、おまかせしますという展開があると、こんなすばらしいことはないのではないかなということを思っております。⁸